

婦人子



第七卷

第七號

# 第七卷第七號目次

卷首	孤 蓬 生
綠蔭	中 村 五 六
家庭と酒	孤 蓬 生
如何に口をさくべきか	上 原 六 四 郎
音楽と男女兩性	佐 治 實 然
いづれが眞の幸福	小 兒 の 睡 眠
應募のお伽話と選擇の標準	湘 南 生
夏期の衛生	新 兎 義 男
夏の飲料	石 井 泰 次 郎
罰と小供	フ ラ ン ク
割烹	硯 山 人
和歌、俳句	
大陸のおさんどん	
「唯今」の夢	
雜錄	
編輯記事	
會費領收	

## 投稿募集

● お伽話 本誌半々年分以上三ヶ年分  
● 短 歌 本誌四ヶ月分以上一ヶ年分  
● 一般記事 選擇の上本誌に収録せるものは  
内規により原稿料を呈す

但し右作品は受賞者の希望に依りて會費と差引き若しくは自ら取  
らすして其指定する人に本會より直接送ることを得  
一注意 短歌は隨意の用紙にて可なれどお伽話及一般記事は一行  
廿二字詰にて半紙又は野紙に書かれたし原稿は凡て返戻致しませ  
ん此募集は期限を定めません毎月十日迄の分を其月に選擇し後は  
翌月に回は何時迄も引續いて行く積りです。  
宛名は本會へ直接御送り下さい。  
開き封て應募原稿と標記すれば三十夕迄は郵税二錢で参ります。

## 質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに關する  
事なら何でもお尋ね下さい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速  
に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

## 入會又ハ購讀手續

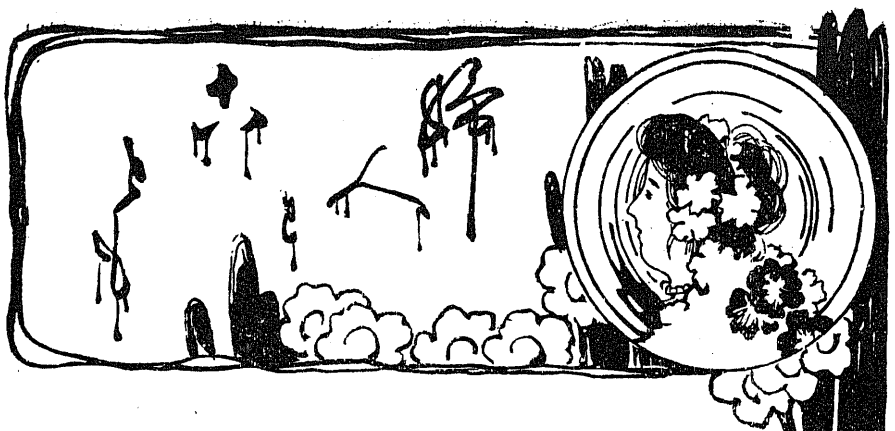
本會に御入會なさうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ年  
分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雜誌を發送致  
します。會員にならずに雜誌だけ讀みたい方は左の割合の前金で本會  
か又は賣捌書店へ御便宜御申込下さい

- 一册郵税共金拾一錢
- 六册前金郵税共六拾錢
- 拾二册同金壹圓貳拾錢
- 郵券代用一割増



説明

本圖は横濱市立尋常老松小  
 學校附屬幼稚園の製作に係  
 り、自然物を利用して作れる  
 手技の成績を寫生し、之に實  
 物を添へて、過般、同市に於て  
 龍された關東聯合教育會へ  
 出品したもので當時該會へ  
 は審査の結果二等賞を授與  
 されたものです。時春夏の交  
 で此處暫くの間は自然界に  
 幾多の保育材料があります  
 から會員諸君も定めし種々  
 な御實驗が御座いませうが  
 参考の爲めに茲に掲げまし  
 た。



## 第七卷第七號

香々

綠 蔭

ウイリアム・リスル、パウルス作

孤 蓬 譯

うまし時、夏の日の

くすし羽音に黄蜂とび

清らま清水咽きて

閑に鳴き行く時鳥

みとり溢る、青葉蔭

むつめる友と袖つらね

そゝろ森かげさすらひて

鳩のさゝめき聞くも樂しや

冬かれの淋しき日

憂になやみ

友にはかられ

雨やみぞれや

窓うつ時も

みとり森蔭さまよひし

友を思ふて歌へは樂し



# 家庭と酒

中村 五六

一生の苦樂他人に因ると云はれた婦人の身に取つては良人の選擇と云ふことは實に容易ならぬ問題でありませうが是は單に婦人一生の禍福のみならず、一家子々孫々の繁榮如何にも關するのですから念を入れた上にも念を入れて撰ばねばなりません。之に就ては世間多くの婦人雜誌にも度々論せられたことで嘗ては本誌上に於ても湯淺氏之が解決を試みられたから根本問題は既に充分明かになつて居るだらうと思ふ。仍で茲には良人の副次的資格として所謂左のさくときかないとに就て所感を述べて見様と思ふ。

一、良人の活動と飲酒

『下戸の立てた倉はない』とか彼は酒も飲めぬ意氣

地なしである』とか「彼は左がきかないから話にならぬ」とか云ふことは能く上戸黨の口から出る事であるが是は何うも多少の根據を持つて居る様である。勿論吾輩は是等の言を悉く信じもしなければ賛成もしては居ないけれども斯る云ひ草の行はれる様になつたと云ふ其原因に就ては多少思ひ當る所があるのである。其は又何故かと云ふに一体酒と云ふものは從來の交際社界では欠く可からざる要具であつた。是がなくては何うも交際は兎角物足らぬ感が起る者であつた。假令理屈は何うあらうとも又一方に宴會改良黨が少しは活動もした改良案が消極的で寧ろ交際を沈衰せしむる爲めに未だに酒は止められない。兎に角此處五十年や百年で酒が交際社會から除かれ様とは思へない。斯様の譯であつたから從來は酒の飲めた人と云ふと交際社界にも入る事が出来た、従つて良人に活動力のあるもの腕のあるものは斯る機會を利用して榮達の途を開くとか或は交際の間に機會を

捕へて儲け口を見出すとか云ふとか出来たしするので上戸黨は何うしても萬歳であつたのだ。故に活動的有爲な材を持つた人などは實際は下戸でありながら上戸黨であるかの如く装ふ事迄もして上戸黨と交際し酒樓に迄も出入したのである。そして全くの下戸黨若しくは飲酒反對黨或は禁酒黨などは自然、社會の一遇に逐ひ遣られて餘り香ばしい事もなく過ぎ去つた譯である。併し此習慣は決して善いものではない。否今日以後の社界には假令下戸黨でも交際社界には差支なく入れる様な社交方法が成り立たなければならぬのであるから此惡習慣は假令全く根絶することは出来なくとも其弊を少くすること又は努めなければならぬと思ふ。故に従來は良人の飲酒を以て世渡りの方便として家庭に於ても大目に見る必要もあつた。即ち良人の活動する上に利用出来ると云ふことで恐んで居つたのであるが今後の家庭には漸次斯る良人を排斥したいものと思ふ。中には隨分之を以

て男の一資格であるかの様に考へたり或は少くも自己の腕前の頼る可き所ある證據であるかの様に考へて居るものなどがあつたのは以ての外に心得違であると思ふ。

吾輩は禁酒會員でもなければ禁酒鼓吹者でもないからして今日以後の社交界から絶體的にアルコール飲料を驅逐しやうなどと云ふ謀本などは決して起しては居ない。けれども是れ外に社交の道がないて云ふのは可笑しな話だと思ふ。又今日の交際社界に出入するとしては多少酒類を喉に通すと云ふことは止むを得ぬことであるから何も之を禁じて能く男の活動方面を狭くする愚を眞似るものではないが去りとして此害物の勢力は成るべく壓伏して遣りたいと思ふ。要するに今日以後の男に酒を飲むことが出来ぬからとして其活動に差支がある可き筈のものではないと思ふ。

二、良人は酒を飲まぬを可とす  
既に飲酒癖の有無と云ふことは良人の活動力如何

に關するものにあらざりしならば良人としては飲酒癖のない人と撰ぶに限りませう。是には種々の理由がありませうが先づ第一に安心なのは飲酒癖のない人は先づ其品行も方正で隠れた不潔な行や又恐ろしい不潔な病氣などを以て居るものではありませう。けれども飲酒癖があれば自然悪い友達もあり花柳の巷に出入りもしませう。そして悪い病氣を持つた人などは大抵結婚後に於て之を新夫人に傳染せしむるものであります。之を某婦人科醫に聞いて見るのに歸人病の八十八パーセント即ち百人の病人中八十八人迄は良人の不品行から傳染したのであると云ふことです。何と恐ろしいことではありませうか。次に飲酒癖のない良人は手が掛らない。勿論妻君が最愛の良人の世話をするのだから手は如何に掛らうと決して骨惜しみなさる方があるまいが、併し主人が飲酒癖があると集まる所悉く其同類で友達が遣つて来る直に酒宴が始まると云ふことでは家庭は常に煩雜を極めるもので

逆も永い間耐えられるものではなく遂には眞に良人の爲めに焼かなければならぬ世話も此爲め略す必要を生ずる様になるものです。

四

次に主人に飲酒癖がなければ大藏大臣としての妻君の手腕は大に振ひ易い譯である。今日中等の家庭で百圓や百五十圓の収入では主人公たるもの酒など飲んで居られるものではありません。若し之を敢えてする人があるとすれば其人は自分獨り中等の生活をして妻君や子供等には下等の生活をさせることになるに極まつて居るし然もなくば數年の後には一家借金取りの包圍中に苦めらるゝに極つて居ります。

次には子孫に害を残さぬことです。御覽なさい不具や白痴の類の多くは皆飲酒家の家庭に多いのを結婚の最終目的は子孫の繁榮にあるものを其子孫が不具や白痴では何の樂しみがありませうか、殊に婦人は老後に子孫の立派に成人するのを見て唯一の樂とするものであるのに之が人にも見せられ



ぬ不具や、から馬鹿と來ては樂しみも何もないではありませんか以上述べた弊害は未だく小さいのです、夫れより最つと恐る可きは良人の生命其ものが危いです大抵飲酒家の最期と云ふ者は中風か胃病で、天死するものです。天壽を終ると云ふことは極めて少ない。従つて之が妻君なるものは良人の存生中は生活難に苦しめられ其上げ句が良人への無給看護婦となり最後には未亡人となつて淋しく一生を終るようになるのが普通の順序でせう。何と恐る可きものではありませんか然るに世には判らぬ人もあるもので主人は晩酌を汲んで獨り悦に入りながら妻君や子供の前で管を巻くのを快しとして居る人がある甚だしきは妻君迄が主人と一所になつて酒を仰ぐと云ふのがある。併し是等は最早吾輩の議論の外で何とも申し様のないものである。斯る家庭に生れ斯る有様を目撃して育てられては眞面目な有爲なものには逆も仕上るものではありません

## 飲んで害なき酒量

衛生上用ゐて妨げのないだけの分量は、何程であるかといふに、甚だ定め難いものである、茲に全く適當な説とは信じられないが、近來瑞西の醫師で研究の上之を定めたものによると、酒精の多いで一日に五十乃至六十瓦までは飲んで、差支ない事になつてゐる、此説に隨ふ時は、歐洲の麥酒は一日に一リットル半即ち凡そ九合までば飲んで害のない事となる、又葡萄酒は一日に六百瓦即ち三合までは差支なく、日本酒は一日に一合五勺ばかりは可い割合である、思ふに是は略適當な分量であらう、從來の實驗によつても、一日に一合内外の獨酌を爲す者には、格別害を受ける者も少ない様である。

日本酒は、酒精の含量は適度であるけれども、其飲み方は好まじき習慣でない、宴會の席上で獻酬をしたり、又其時間が大層長きに互つたり、又客に強ひ侑めて酷酔せしむるのを、主人の務めと心得てゐる、是は各杯にして、各自が隨意に飲む方が宜からう、斯くしたならば、時間の費えをも省き口中の病毒を傳染する虞も防ぐことできる。





# 如何に口をきくべきか

孤蓬生

佛蘭西のフエネロンといふ人は有名な教育家であるが、其の著女子教育論を見ると、女子教育に於ては先づ其の特有の缺點をあげて之を直さなければならぬといつていろ／＼な缺點をあげてゐるが其中に婦人の冗辯も數へられてゐる、そして彼は之は最も忌むべきものであつて子供の時から之を矯めねばならぬ。それに世の人達は子供に無暗に喋らせて、妙にひどく喋るのを見て面白がつてゐる、之は非常な間違だと叱つてゐる、余は女子の多辯なる事には絶對的悲觀はしない。世皆善からざるものなしで、やつぱりそこには善い所もある。必要(實用的に)である場合の外は語らぬとしたならば人は如何に殺風景であらうか。物は實用とい

ふ外に裝飾とか趣味とかいふ方面があるのだから言葉だつてさう日がな一日用事の事ばかり、四角四面な事ばかりではまだ其職能を盡したとはいへない。要は『程』である、中庸を得るにあるのだ。全体男と女とは餘程頭の働か方が違ふのでそれが又言葉になつて現はれるのだから、女の連想の方角と男の連想の方角とが一致しない爲に男から見ると女はつまらぬ事をくどく喋つてゐるやに思はれる事がある。つまり女は感情的に聯想するから比較的理性的に働く男子の聯想とは一致しない(勿論其の女子の感情的なるが爲に之につりこまる事もあるが)。ゴルドン將軍のバレスタイン感想録に『舌は長辯にして蛇の如し、而して女子が遺憾なく之を表はし而かも人之を怪しまざるは不思議なる事なり』と女はさきに食ひたるに其舌が女子の特別の長所たるは不思議なり』と、女がさきに食ひたるにとは西洋の傳説のアダム(男)イヴ(女)といふ世界の初の先祖があつたが其イヴの

方が神から禁ぜられた樹の實をさきに食つたので人間は遂に罪を犯す様になつたといふ事があるからである。けれども自然は公平であつて男を強く作つた代りに女の方は舌を長く作つたのである。婦人諸君は此の天與の賜を善用せずして利用する義務がなければなりません。

で女子が常に其家族なり友達なりお客になりとよく氣の利いた、快活な話をする事の出来る才能を養ふといふ事は最も大切である。快活に上手に話をする婦人の側にゐるとさういつでも春の日の暖かい日光がさつと當つてゐる様な心持がするものである。人はよく無口の者は實があるといふが、之は實があるといふ事を褒める言葉であつて、無口といふ事を褒めるのではない、實もあり話も上手、即ち心も八丁口も八丁の方がいいのである。只、口が十丁にもなるといけないのである。或蓮葉な婦人があのヲセラスを書いた有名な文人ジョンソンの所へ來て『殿方とよりは女とお話しなさ

るのがお好でせう』といへば、博士は『はい、いかにも、私は御婦人の美しい事、優しい事、それから沈黙でいらつしやるのが好きです』と答へたさうですが之は只婦人が心にもなき事を又は愚かな事をベチャクチャ喋るを當てこすつたものでせう。口先ばかりが甘いといふ人は當にならぬものである、所謂『淺き瀬にこそあだ波はたて』で、饅でも水がいつばい入つてゐるときよりは少ししか入つてゐない時の方がバチャバチャ鳴るものである言葉にも此眞實に實のある誠の單つたのがほしい。淺いのはゆかしくない。美しい心、善い心、高い品性があれば其人のいふ話も亦之に従ふもので喩へば鉛やブリキの音よりも銀の音が涼しく心ゆくものであるが如くである。由來我國では儒教の主義として昔から所謂沈黙寡言を貴んで來た所から自然の與へた此話の能力を發達する事の出来なかつたのは頗る遺憾である。今日は文明の教育で女子などはよく話す事を獎勵されてゐる様であるが

まだく足らない。女學生諸君は面白相によく喋るが一般に淺い、低い。いは品がない。之は修養が足りないからだ。訪問のお客には物質的の御馳走よりも座談對話の甘い方がどれ程御馳走だか知れない。

對話の精神は同情である。話をするには自分がそれによつて快を感じるといふためでなく、其聽者を喜ばす爲でなければならぬ、之には相手の氣合をよく呑み込んで話の題目をみつければならぬ。人によると自分の事や自分の子供の事や自家の下女の事や、つまりぬ事を口から出まかせに、其座に合ふまいが合はふが一切拘ひなしで喋る人があるが之はいけない。かういふ癖の人は寧ろ氣の毒である彼の有名な英雄傳を書いたブルタークが曰ふた事に『人の缺點過失には嗤ふべきものあり忌むべきものあり又危険なるものあり、而して冗辯は此三者を具有す』といふ語がある、謹まなければならぬ、詩人のコンリツヂは切りなし

に話す人であつたが人はみなその切りなしにいつまでも話すのを聴きたがつたといふ事である。出来るならかういふ風にありたい。

話には時と場合を見なければならぬ。何も言ふてはならぬ時もあれば、何か言はなければならぬ時もあるけれども、何んでもかでも有つたけさらけ出して話さなければならぬといふ時はない。何でもかでもいつてしまふ人は愚である。かういふ人は舌を使ふのでなくて舌に使はれてゐる人である。舌の奴隸になる人は時にあられなき事をいひ出す。ポーブが『言葉は葉の如し。其の多きに過ぐる所には實少なし』と或詩の中に歌ふた事がある。又或人は屏風の後に速記者が自分の話を寫し取つて明日の新聞に出さんとしてゐるのだと思つて話をするがいゝと誡めたさうである。

人が集るとよく他人の噂をするものである。只の噂はいゝがぢきそれが悪評になる。人間の弱點特に女子の弱點でどうも人の短所が目につく、でそ

れがちきに口に出るといふ風である。之は最も注意すべきである。自分がこの悪習に陥らぬようにすると共に人がそれをするのもいやになるやうにならなければならぬ。人によると他人の悪聲をきいて喜ぶ者がある甚だしきは根ほり葉ほり人の悪い事を聞きたがる者がある。之は其人の品性の劣等なのを自ら廣告してゐる者である。他所の家から肉をくはへて来る犬は自分の家からくはへて行く犬だといふ諺があるが、人もやつぱりさうだ。それも實際の事ならまだしも、或事實に自分の邪推を附け加へて他人を悪くいふ者がある、之は自分がぬぢけた性質の證據である。ある婦人が近所の婦人が柄の太い帯を買つて行くのを見て、あの人は亭主を叩くのださうだといつたさうであるがさういつた人こそ亭主でも叩く人に違ない。あんまり出鱈目に喋つてゐると嘘も眞も一所になつてしまふ。或る佛蘭西の一貴婦人が來客を受けた時、畫室に案内して先祖以來の家族の肖像を見

せて居つたが、其の中の一つを指して客に向ひ、『そこに軍服を着けた士官が居りますでせう。あれは私のお祖父さんのお祖父さんに當りますんでまゝ勇ましいつたらまるで獅子の樣でございまして、まことに運の悪い人でして——。戦争をすればいつでも一本づゝ手や足を失ひますんで、』とそこまでは流暢でよかつたが『廿四度も戦争をしました』といつてしまつたさうです。これでは折角の御自慢も水の泡、あはれ英雄も廿四本の手足を持つた片輪にされてしまつたのである。言葉といふものは仕末が悪い一度口から出したらもう驕馬も及ばずで取りかへしがつかない。西洋にかういふ話がある。フィリップ、ネリ(十六世紀頃の、高僧なり)の所へ一婦人が尋ねて來て、私は誠に人のわるい事をいふ悪い癖があつて困ります、どうか直して下さい、といふて來た。するとネリはお前の罪は大きいが併し神の御慈悲は又大きいから、心配には及ばぬ。只私のいふ事をお聞きなさ

い先づ町へ行つて殺したてのまだ羽のある鶏を買つて来て、それをどこか少し離れた所へ行つて、歩きながら羽をむしつて来て下さい、むしつてしまつたら直ぐ歸つてお出でなさい」と命じた。婦人は此の妙な命令通りにやつてからどんな教を下さる事だらうといそ／＼と歸つて来ると高僧は更に『よく忠實にやつて来ましたな。さあもう一つやつて下さい。之が出来るとすぐに貴女の癖も直ります』といつてさて此度はもと行つた通りの道を行つて先刻むしつた羽をみんな拾つて来いと命じた。すると婦人は困つて『私はみんなうつかりむしつては捨て、しまひましたので、風がみんな吹き飛ばしてしまひました』と答へた。そこでネリはお前の之までの罪もみな其通りだ、もうとり返へしはつかない。只之から注意して再びしないやうにしないといふと誠めたさうです。之は家庭に於て最も注意すべき事で、子供の前などで此の悪習慣の例を示してはならぬ。多くの中流以上の家

庭でも之が行はれてゐるかどうか怪しい、話す事が上手になると共に、婦人はまたよく聴く習慣をつけねばならぬ。會などでよく見うける事だが聴いて居るべき時にこそ／＼話をしてゐるのはよくない。ある佛蘭西の貴族が若い者に注意を與へて、美しい女と結婚するのよい、金持の娘と夫婦になるのよい、が、何れの場合に於ても、よく傾聴する婦人を娶れ』といつた事がある。オセロの話を御存じの方は御承知でせうが、彼のデズデモナがオセロの愛を得たのはよく傾聴する事が出来たからであつた。婦人によると子供や下女をやたらに叱り飛ばし始終小言ばかり言つてゐる人があるが之は注意すべき事だ。子供を善き性質に育て、親に同情あるものとなり、秘密なく何事も母親に打ち明けるといふ風にし下女は從順に喜んで働くといふ爲には、さうやたらに叱つてばかりいてはだめである。悪い事を多く指摘するよりは善き事を示す方がよいのである。



## ○音樂と男女兩性

上原 六四郎

音樂と男女兩性とは如何なる關係を有するかといふに、女子は男子に比較するときは、情に纏まり情に傾き易きと共に、割合に忍耐力が強い。或學者は女子は情と愛との塊であると言うて居るが、實際斯く評せらるゝ程情に厚いもので、且つ女性に男性に比較すると、身體を飾るといふ念慮も餘程強い。音樂と男女兩性とを較査すれば、音樂は特に女性に適當して居るやうに思はれる。其爲であらう。西洋でも日本でも婦人の方が一般に最も音樂を嗜むやうだ。先づ何人でも深窓に於て琴を彈するのを聴くときは、其人は如何にも美しい、又如何にも奥ゆかしい人の様に感ぜられ、直接に其人を見ずとも其美情を察することが出来る。音樂

は實に此の如く女性に適したものである。然らば女性には何か注意すべき弱點がないかといふに、夫れは決して無い譯ではない。抑も古來女性の音樂家には何故か名人が出ない、就中作曲家に至りては全世界を通じて全く絶無である。外國の歴史などを調べて見ても、女流作曲家は一人もない。日本でも之と同様で、随分藝に精しい女子はあるけれど、作曲に巧みなる者は曾て聞かぬのだ。また技藝として音樂を奏する人にも男子が多數を占め、例へばピアノにせよ、ヴァイオリンにせよ、又我國の琴三味線にもせよ、平均すると男性の彈奏者が多いやうだ。併し奏樂上女性の特長と認むべく、男子の企て及ばざる所の者は、音聲である。蓋し音樂には低聲よりも高聲の方が好く冴える。時としては雄壯快活にも聞こえるし、又時としては非常に悲しく哀れにも聞こえる。然るに斯神の高聲は男子には發し難い。之に反し女子は其特性として高聲を發するに適する。従つて歌ふ事に就

ては、世人は多く女性の方に同情を表するやうだ。尤も低聲でも美聲の人でもないではないけれど、人を感動せしむる力は比較的、高聲の方にあると思ふ。又音楽は現今器樂聲樂との二種に大別せられてあるが、其中最も妙味の存するのは聲樂で、洋樂に於ても特に珍重せらるゝのは婦人の音聲である。専門家としても若くは素人としても、女性が音楽社會に持離さるゝのは無理はない。

叙上の如き事由あれば、女性で音楽を學ばんとする者は器樂よりも、聲樂を修むる方が得策である。之を以て專業として社會に立つと、將娛樂の具に供するとを問はず、女子は其特長たる音聲を練磨して、樂界の霸權を握るに若くはないと思ふ。又女子は兎角物事を氣にする性癖あり、或は家事を整理する事に就き、或は親戚知人との交際に就き殊に兒童の養育に就きて細密に氣の付くだけそれだけ心配が多いものなれば、此重荷を成るべく軽減せしむる方法を授けるとが必要であるが、適度

の音楽練習は、女性に對して一種の攝生法たる事を得べく、一方に於ては精神を慰め、又一方に於ては身體の運動に資するといふ兩益がある。尙音樂の修練上大に反省を促さんとするは深入りして研究する事である。音樂は深く入りて研究しなれば妙味を解することが出來ぬ。音樂は凝ると弊害が生ずるゆゑ不可ぬといふ人あれど、予は此説に服し難い。何となれば音樂は深く進んで研修せざれば、真正なる趣味は湧いて來らず、而して真正なる趣味を解せざれば、自然之と隔絶する事となるべきを以て、十分趣味を解し得るまでは深く入つて討究する必要があるからだ、予は尺八を好んで吹いて居るが、之を吹奏するには、力ながらに満たして肺の呼吸を十分に作るから、坐ながらにして非常な運動になる。此等も衛生上有益なるものであらう。然るに西洋の婦人は知らぬが、我國の婦人は練習の時でも、演奏會の時でも、何分高聲を發することを遠慮する風があつて困るが、



併し之は畢竟一種の習慣なれば矯正せられぬ事は  
ない。樂界の風潮が其方面に向へば、皆競うて高  
聲を發するやうになるに相違ない。之を要するに、  
音樂の中でも、女性の學ぶに適當であり、且効益  
多しと思はるるは、器樂よりも聲樂に屬するもの  
なれば、斯道を研究せんとする女子は成るべく此  
方針を採るやうに勧めたいと思ふ。



▲いづれか眞の幸福

(佐治實然氏)

私の生國に伊賀安太郎といふ人がありまして、一時衆議院議員にもなつたことがあります、此人は不幸にして終りを全ふせずして段々貧乏して死んだ、其人の未だ金持で田舎に居つた頃には大百姓でしたから、奉公人が男女取雑で五人も七人も居ります、丁度田舎で夏休みをして居ました日で團子を拵へて下人がシタ、カ食べて居る、其處から一間二間隔つた上の間で主人が蒲團の上に坐つて茶碗に眞白なお粥を入れて向ふに鯛の刺味か何かあつてテリ焼などが付いて御飯を食べて居るところで、其時聞いた話が面白かつた主人が云ふのに下人共はアノ通りまづい團子でもシタ、カに食ひますが、アレで晩に饅頭を拵へますと又澤山食う、ア、云ふ風に働く奴等はどれだけ食うて置いたら腹がへらないだらうと云ふことを何時も念頭に置いて食うて居るやうですがそれでも直にへつてしまふ、私は此の通り粥を一口ぐらゐづゝ入れるのを二杯と、刺味を漸く一切か三切くらゐ、それで何分腹がへらない、膳に向ふときどのくらゐ食つて居つたらへるだらうかと何時も腹のへることを考へる大層な違ひですと云ふ話でありました、其後殆ど三十年或る機會に觸れ或る折に觸れて常に私は其話を思ひ出す之が所謂今日の文明的紳士の生活と田園生活とを代表して遺憾なく現はされて居るところ、人生眞の幸福は此兩者いづれにあるでしやうか(新公論)

## 小兒の睡眠

是は獨逸の某雜誌に見えたりとて婦人衛生雜誌に譯載せられたるを轉載せしものなり

### (一) 小兒の睡眠時間

假りに老練で經驗に富んだ醫士に向つて『小兒が眠られないがために是非其催眠劑を處方らねばならない場合は多いものか何うか』と聞いたとすれば、醫士は定めて『そんな場合に遭遇したことは一回も無い』と答へることとせう。實に睡眠は小兒に向て貴重なる財産で、これを盜まれることの少ないのは幸福至極のこと、云はねばなりません。呱呱たる勇ましい初聲を上げて一家のうちへ賑はいと希望と幸福とを齎らした天の使の様な嬰兒は初湯のあとで暖かにさへされてゐればスヤ／＼と熟睡して、遠さあの世の潔き夢を見てゐるもので寒いとか飢いとか云ふ不快なる感じさへ無ければ、目を醒ましてなきたてることも無いものであ

ります。この不快なる感じを早速取り除かれて仕舞へば又も元の眠りに歸つて、平和で汚れの無い心の様をその儘に顔面に浮かべて、見るからに罪の無い天国の人の様になるのであります。生れてから大凡三ヶ月の間は睡眠がその生命である程で、間がな隙がな眠つて計り居るもので、覺醒する隙は極めて少いものであります。次の三ヶ月即ち四ヶ月乃至六ヶ月の小兒になると、腦や神經がだん／＼發達して、外界の物ごとに多少づゝ氣を留める様になり、從つて睡眠と睡眠との間隙が稍々長くなる様になります。七八ヶ月から滿一年の頃になれば精神作用は益々發達して、或目的に向て心をはたらかせ、或有へに從つて活潑に手足を動かす様になり、理解力もだん／＼發達して周圍の事柄に對し、面白味と、好奇心と慾望とを以て之を見聞し、覺醒の時間は漸く長くなつて睡眠の時間は追ひ／＼減する様になります。それでも尙ほ一日二十四時間の大部分は大方睡眠のた

めに消費さるゝ者であります。

二歳の末から四歳の始めにかけては少くとも夜は十二時間、晝は一時間乃至二時間の睡眠を要するもので、夜間十二時間乃至十三時間の睡眠を妨げなしに出来る四歳以上の小児には、さして晝寝をさせる必要も無く、之を強ふるのも亦た困難であります。

一般に小児の睡眠時間に就ては年齢によりて多少の相異はありますが、四五歳以上の小児には九時間から十一時間位は是非共安眠させねばならぬもので、破瓜期になつてから始めて之を短縮すべきであります。

## (二) 小児の睡眠障碍

小児の安眠を妨げ若くは安眠から覺醒せしむる原因にはいろいろあります。

痛み性の創傷の病氣が身體の何處かにあるか、咳嗽を込み上げて呼吸作用が困難であるか、下痢や腹痛があつて堪へられぬか、皮膚に痒癢性のある

病氣があつて煩はしいか、鼻がつまつて息の出入れが苦しいか、熱があつて譫語を云ふか、都てこれらの場合には寢付きも悪く、寢入つてからも亦醒め易いものであります。

腦神經の病氣で睡眠不安の状態の來ることも決して少くはなく、彼の強直性痙攣症と云ふて筋肉の引きつれる病氣でも夜間全く睡眠の妨げられ、夜驚症或は夜啼症と云ふ小兒特有の病氣では勿論睡眠が出來ないで、乳母や母が去つて夜一と夜泣き明かすことがあります。夢遊症と云ふ病氣も折々之を見るもので、今迄スヤ／＼と寢て居つた小兒は急に臑氣の姿で寢床から跳ね起き、用事でもあるかの様に室内を徘徊し、時には庭園など至散歩して後再び眠りに就き、翌朝になれば全く昨夜のことを知らぬものであります。癲癇殊に夜癲癇の小兒には屢々睡眠が妨げられて危険の狀態に立ち到ることがあります。

人文の進歩に連れて追々増えて行くものは神經質

の小兒で、不眠もその徴候の一つとして現はれて来るものであります。小兒の神經質になるのは一生來と性質にもよりますが、又父母家庭の教育が誤まつて居るのも與つて力あるものであります。由來小供を教育すると云ふのは何人にも易からぬ仕事で、老練家でも尙は且つ難しとする所であります。況して愛に溺れ易く、情に激し易く、時としては興に戯れて前後を忘れ、時としては烈火の如く怒りて嚴罰度を過ぐす様では決して適當なる教育を施すことは出来ません。この様な家庭は多くは整然たる秩序と云ふことが無いもので、従て小兒の起臥飲食にも一定の規律がなく、夜の更くる迄徒らに起きてゐる事が多いのであります。這へば立て立てば歩めとは世の人の親心で、古今東西親子の情にはさして變りの無いものであります。が、さりとて年齒もゆかぬ幼な兒に向つて無暗にいろ／＼のことを教へ込むのは良い様で決してよろしくはありません。まだ充分に發達しない身

體へ重荷を負はせると同様に、小兒の薄弱な神經系統は之がために疲勞して、身體の健康に重要な夜間の休息すらも出来ないやうになります。

小兒として大人と娛樂を一緒にさせるのも大なる誤りで、小兒には小兒らしい遊びを小兒等と共にさせねばなりません。大人の中へ立ち交つて遊ぶ子は何處となくマセてゐて、身體の成熟はまだ々々不完全であるのに神經のみ獨り過敏になるものであります。

睡眠不足の害は小兒も大人も同じことで、體力はだん／＼に衰弱し、精神も益々沈鬱して、物を記憶へ事を習ふと云ふ元氣もなくなり、いろ／＼の病氣に對する抵抗力も消失して、果ては無能病羸の人となり下るものであります。

### (三) 不眠の療法

『大將を倒すには先づ馬を射つたがよい』とは昔からの諺で、病氣を癒そうとするにも先づ原因を退治したが捷徑であります。病根さへ發掘して仕

舞へば『寝付きが悪ひ』とか『睡眠が足らぬ』とか云ふ枝葉は、自然に枯れ果つるものであります。サラバ病根を發掘すには何うしたらよいか、これには總ての場合に於て左程までに重大のものと思ふに出来ない些細な事柄までも、細大漏らさず詮議をして何處に病根の潜んで居るかを探知せねばなりません。即ち一般の生活の有様、平素の習慣、生來の氣質、身體の榮養、教育の方法等に亘りて廣く詳細に注意すべきは勿論、學校の成績、家庭教育の效果なども參考し、又夫れ／＼の専門醫から耳と云はず眼と云はず身體の内外、体温の昇降等まで委しく診察て貰はねばなりません。かくて不眠の原因が全く肉體の上にあれば多くは醫士の治療によつて治はるもので、例へば夢にばかり襲はれるて、終夜安眠の出來なかつた小兒が、鼻咽喉の部分にある淋巴線の肥大したのを療治して貰つたがため、急に安眠の恢復した例は決して少くはありません。

一般の生活方法を改め、秩序的生活をさせる様にするのは何れの家庭にも必要で、寢る時刻と起きる時刻とを精確に定めて、苟且にも之を破らない様にすれば、定刻になれば自づと睡氣を催はす様になるものであります。食事の時間と飲食の分量も大凡そは定めて置くのが良く、只時と場合とにより多少斟酌すべきであります。更深けてから夜食をして胃を充満させるのは睡眠不安の一因であります。飲食物も詮議して香の高ひものや、お酒の入つたものや、濃い茶及び珈琲等は之を避くるのが宜い。

學校及び家庭に於て無暗に注入教育を施し、頑でない子にこれも教へ、何れも習はせ、徒らに『小兒學者』を造らうとするのは大なる缺點で、これが爲めに伶俐くはなるが偉大くはなれない、敏捷にはなるが度量ある人とはなれぬ、早熟はするが晩成を期することは覺束ない、廣く物事には通づるが深く原理に達することは出來ぬ、『十歳で神童

十五歳で才子、二十歳過ぎでは尋常の人」と云ふのは此種の教育を受けたものに多い。よしや小児の時は鈍才でも將來益々發展することが出来る様にするには、學校及び家庭はその責に任じて、過度の學課を命ぜぬ様に心掛けねばなりません。種々の方法を竭くしても治ほらない様な頑固な不眠症の時には、周圍を静かにして小児の神經を刺激せぬ様にし、燈火を滅して暗黒にし、信用のわる母か祖母がその傍に来て、時々手を擦で身體を摩つて、小児の神經を安靜にさせ、或は單調で意味の淺い昔話しや、小児の神經に觸らぬ様なお伽噺しを、極く輕妙に低い聲で談してきかせ、又は昔から傳つてゐる睡歌などを低唱して、次然／＼に眠に誘ふときは遂に之に釣り込まれて寢入る様になるものであります。蓋し小児の大脳は既に疲勞して居るから、眠らせるに都合の良い機會さへあれば速に他愛も爲くなるのは必定であります。昔から傳はつてゐる搖籃は寧ろ有害であつて、今

日では餘り用ふるものは無いが、尙ほ小兒を懷抱いて之を左右に搖り動かして眠らせる法は、國民一般の用ふる所であります。これは確かに有害で、之がために小兒は輕度の眩暈を來し、度々くり返さるれば遂に腦や神經を害するに至るものであります。

子兒を寢かし付けるために或は寢入つてから後も母や乳母やその他の人が一緒に寢ると云ふのは良くないことで、精神上の害は云ふ迄も無く、衛生上に於ても小兒と大人と兩方に不利益であります。初生兒の之がために壓迫されて窒息して死する場合は決して少くないもので、日々の新聞紙上にも往々散見する所であります。母や乳母の乳房のために窒息して死する子兒は、我國では何の位の數に達するものか知りませぬが、十八世紀に有名なスエーデンの小兒科醫ローゼンスタイン氏の云ふ所に由ると、同國で斯様にして死する乳兒は一年間實に七百人に及ぶとのことであります。

寢室を暗くし、周圍を靜かにすると云ふのは、充分なる安眠をするに必要な條件ではあります、若しも小兒の之がためには却て不安の念を起して寂しいと云ふ感覺にうたれ、或は怪物や幽霊の來りはせずやと氣遣ふ様な場合には、燈火を點けて寢かすのも大に有効で、小兒は之がために周圍の人と連絡があると云ふ考へから安心して眠り付くことであります。

神經が過敏で眠られない子兒に適度の溫浴をさせるか、身體に濕布繃帶を置くか、ぬれた手拭で身體を擦摩るかなども、催眠の効を奏するものであります。盛んに運動を奨励して日中新鮮なる空氣中で身體を疲からせる時は、夜に至れば全くグツタリして、一夜を一睡に過すものであります。



●羽織の裏は如何にして積らば便利なるか

羽織の裏を積るには、袖丈を八倍したるものと、身丈を十倍したるものとを加へ、更に縫しる襟など、二尺五寸を加へ、其總尺より表用布を減きたる残を、裏用布の寸尺とす。

例へば袖丈一尺四寸五歩なれば、之を八倍して一丈一尺六寸となる。身丈二尺六寸なれば、之を十倍して二丈六尺となる。此の二口に更に二尺五寸を加へ三丈九尺一寸となる。是れより表用布二丈八尺を減けば、一丈一尺一寸となる、之を裏用布の寸尺とす。

●袴の紐下寸法は如何にして定むべきか

男の袴は着物の着丈に〇、六を乗じたる數を袴紐下の寸法とす。

例へば着丈四尺とすれば、四六、二尺四寸を紐下の寸法とす。

女の袴は着丈に〇、七を乗じたる數を紐下の寸法とす

例へば着丈三尺とすれば、三七、二尺一寸を紐下の寸法とす



應募のお伽話と  
撰擇の標準

湘南生

本誌がお伽話を募集してから數多き原稿が月々方々から投稿されるのは誠に喜ばしきことで記者は檢閲の煩を忘れて多々益々其多きを希ふて居る次第であります。處で一二の方から何う云ふ種類のお伽話が必要なるか、何う云ふ風に作つたらよいかそちらの注文を聞かして呉れと云ふ御尋ねが一寸いゝ見えますので今本號の餘白を假りて少し應募原稿審査の大方針とも云ふべきものを御披露申さうと存じます。尤も理屈を云ふと事は面倒になるもので兎角仕事は口より手の方ですから餘り理屈に拘泥して是うでもあるまいか彼れでもなからうと躊躇なさるよりは興があつたら一氣呵成に續々御投稿を願ひます。餘計な話は後廻しにして先づ私共が談話材料を撰擇する第一の要件とも見

て居るのは一談話の内容に興味あること、であります、一興味と云ふものが子供を活動させる唯一の動機、唯一の條件であつて、興味を多方に發達せると云ふことは感覺の練習と等しく幼稚園の様な基礎的教育で大に努めなければならぬものです。談話が幼児教育に必要なのも其理由は職として幼児の興味を刺戟して之を發達させ様とする所にあると云はねばなりません。して見れば談話には夫々或る興味を持つて居なければならぬ筈であります。人に因ると談話は教訓の爲めにするのであるから興味は目的とす可きものではない。且又單に興味を逐ふと云ふことは恐る可き結果を生ずるもので決して教育的手段ではないと云ふ人があります。是は極めて淺薄な考で頗る偏狹な思想と云はねばなりません。如何に教訓の爲めだからとて子供に取つて毫も感興の起らぬ様なものは之を採つても何の効もないものです。庶物に關する對話など

は尙更然りで内容に興味がなければ小供は逆も注意を持続する様なことは決してない、直に倦いて仕舞います、小供が倦いて仕舞つた時は最早教育は到底行はれるものでもないし又行つた處で寸効もありはしません。是が大きな子供ならば材料其物には現在興味がないにしても學習の習慣や自己の努力で注意を集中することが出来るし、其中には相當な教育的効力を現はすことが出来ますが幼兒には斯る意志の力と云ふものはありません。つまり幼兒の教育は全く受動的注意を利用することに於て成功しなければならぬものであります。興味は即ち受動的注意の唯一條件で受動的注意の流れ行く所は即ち興味の存する處であります。故に幼兒に聞かす可き談話材料は此受動的注意を左右し得る位のものでなければなりません。従つて何等かの興味を存すると云ふことは談話の必要條件の第一であります。

第二は敎訓の程度です。

談話の材料に敎訓を含むと云ふことは當然の事で決して悪い所ではありませんが、併し談話は矢張り談話で敎訓は敎訓で、もと／＼二つのものは異なつたもので、唯、時々一所になると云ふに過ぎないのでから、談話は必ず敎訓を含まなければならぬ様に思ふのは大變な間違です。然るに世間には

『敎訓は即ち教育で、敎訓を離れて教育はない』と云ふ様な考を以て口を開けば必ず敎訓を與へ様としたり、幼兒教育に談話を利用す可しと云ふ意味は敎訓を含める談話材料を選べと云ふことで談話は徹頭徹尾敎訓と離れ可きものでないと云ふ様に考へて居る人が随分と多い様であるが是は甚だ狭量な考へと云はねばなりません。學問と教育とが道德の修養に限られて居つた舊日本の教育ならいざ知らず、苟も多方の修養を旨とする今日の教育には餘りに偏狹であります。勿論道德的修養も教育の大なる部分には違ひありません。併し又同

時に之が全部でないことは確かなとであります。

して見れば談話の中に教訓の意味が含まれて居ないからとて之が非教育的であるとは云はれまいと思ひます。

小學校の教科の中にも随分之に類するものがあります。例へば手工だの体操などは其類です。是等の教科は別段に教訓を含んで居る様にも見えませんが其教育的價值は非常なものです。幼兒談話の中にも之に類するものが幾等あつても別段悪いと云ふことは出来ずまい。能く子供の話して居る話ですが、

「お湯屋へ甲頭魚と金魚と鯛とが來ましたら火事がありました。スルト金魚が近所が焼けたと云ひました。鯛は大層焼けたと云ひました。甲頭魚は方々が焼けると云ひました。」

の話などは何等の教訓も含んで居ません。そして其結果は何等の勸善懲惡にもなつて居りません。併し清らかな小話の中に滑稽美と文學美とを感じ

しむる所は毫も教育的價值がないでせうか。是等の話に因つて幼兒の快情を維持すると云ふことは教育的價值がないでせうか勸善懲惡でなければ教育でない様に考へるのは道德的修養でなければ學問でないといふのと同じです。

吾人は數多の應募の原稿中からして教訓的材料を選択すると同時に大に又這個美術的材料の蒐集にも決して躊躇しない積りであります。

要するに幼兒教育に必要な談話材料は分量の上から云へば非常の多數でありますが其多數の全部が悉く教訓的でなければならんと云ふことはないので、其中には單に幼兒の快情を保持し其文學的趣味や滑稽的興味を刺戟するに止まるものがあつても然る可きだと思ひます。

### 第三教訓的材料の二方面

教訓的材料には二つの方面から進むことが出来ます。即ち一つは斯うせよ彼せよ、と云ふ方面で、凡て積極的に善行善爲を勸めて行かうと云ふの

であるし、一つは此反對に斯る行はしてはならぬ、此行も悪いのだから真似てはいけぬと云ふ様に消極的に惡爲惡行を示して避くる所を知らせ様と云ふのであります。

稍長した程度の兒童ならば單に積極的にはかり勸めないで、時には消極的に避くる所を知らしむることも必要ではあります、併し幼兒教育には是等消極的の教訓は全く何等の効果なきのみならず却つて大害あるものと云はねばなりません。何故と云ふに何も知らない白紙の様な幼兒の頭に惡爲惡行の實例を先入せしむると云ふことは取りも直さず惡行に傾き易き偏向を與へ先づ第一に惡に就きて考へを運ばすと云ふ智慮的習慣を與へるので後來に改め難き恐ろしき根據を與へることになるからであります。且又凡ての行を指導すると云ふのに單に行ふ可からず行く可からざる所丈けを示したからとして理性の發達して居ない兒供には何れの進路を取る可きかい判りませんから、つまり適

歸する處に迷ふと云ふことになつてしまひます。全体幼兒の行はに模倣に因つて進歩するので學習は眞似ることから始まるものですから幼兒の行を進め様とするなれば模倣すべき行や眞似るべき行を幼兒の目前に備へて誘導するのが最良の方法であるといふはねばなりません。

第四惡意の成功を示せるものを避く可し教訓の意を寓することがなくても幼兒の感興を惹起するものならば採つて以て材料とすることが出来ることは前にも述べた通りですが、併し其中には惡意の成功した有様を叙したものがあります。之は避けねばならぬのです。何となれば幼兒には未だ道德的品性と云ふものが確立して居ませんから此時代に善なるもの、美なるものが先入して是が土台となつて其上に品性が築かれると云ふ時には品性は自然善美なものとなりませうが、此時代は不潔なもの、醜惡なものが先入すれば従つて純潔な品性と云ふものは到底出来難い譯であります。

故に惡意の成功した有様を叙したものは沒書と致します。

第五烈しく情緒を刺激するものを避く可し。

非常に怒つた時には顔面や手足が何んなになるかと云ふことは誰も覺えがあることでせう。其他非常に悲しかりし時、非常に恐ろしかりし時などには生理的に身体の上に大なる變化が現はれるものであります。唯一度でさへ斯うですから、斯うことが幾度も續き幾度も繰返されたらば遂には身体上にも精神上にも一種の永續的異狀を來すことは明かなことで、子供などには殊に著しく表はれるものです。要するに幼兒を靜平な外圍の中に置いて常に愉快に平和に其心情を保たしむることが教育上大切な事であります。

從つて幼兒に聞かす可き談話材料も烈しき情緒を起さないですむものを撰ばなければなりません。殊に悲哀、憤怒、恐怖の情及殘酷の感を與ふる様なものは注意しなければなりません。

第六繼母を材料としたものを避くべきこと

二十四

從來もてはやされた童話の中にも坊間にひさがれて居る少年雜誌の中にも繼母と繼子との關係を材料としたものがあります。數多き讀者の投稿の中にも折々見えることがありますが是等は避く可きものです。世間には繼母や繼子は澤山あります。會員諸君の毎日扱はれる愛兒の中にも必ずあります。然るに是等物の道理も辨へず反省力もない幼童に繼母の失行や失策を話したら、彼の繼子根情は益々募るとも劣ることはありません。又假令現在其處に居る子供に繼母を持たないものはないとしても人は無常です、何時夫等の子供の一人が繼母を戴かなければならないかも知れません。故に是種の話は少年少女に決して聞かす可きものではないとせません。投書中には是等の材料があればドシ／＼削つて仕もうか若しくは沒書です。

以上でお伽談撰擇に關する内容上の標準が示された譯けです。此外に尙文章上の撰擇標準がありますが余り長くなりましますから今回は是で擱筆いたします。



## 夏期の衛生

新免 義男

梅雨も最早來まして追々暑さが一雨毎にさびしくなるに従ひ赤痢コレラマラリヤ等の傳染病や脚氣だの急性の腸胃加答兒に罹り腹痛吐瀉など流行して幼兒の如きに至りましては俄かに引付けたり突然大熱を發したり遂には腦膜炎など恐ろしき病を引起す物騒な時季に近づきました是等の病敵を豫防いたしなすことは誰れも承知のことで飲食衣類土地家屋等に關する一般の衛生法はくどくしく申述る必要がありませぬか夏季には春秋冬の時に比ふれば急性の傳染病や劇性の消化器病は尤も多くありまするは何故であるかといふ話をいたします此話を説明すれば一々衛生の禁條を挙げ何

々の食物は如何して用ゆとか飲物衣服家屋は斯様に處置せよなど、細かなる葉葉の説明を致すより根本なる原因を陳述すれば夏季の衛生上全般に對して衛生法の應用が出來ますから枝葉はすてゝ云はず夏期の衛生に關する状態を説明致します梅雨の時から夏期に涉りましては氣中には水分が澤山に含まれ濕熱が高くありますから此世界は恰も麴の製造場菌室の如くであるそれで氣中の有機微菌は生活し繁殖するに最も好き時節で種々の微菌は大に勢力を得て各適合する物体に寄生して水分との助けを以て營養物ととり生長繁殖いたします御承知の通、梅雨頃より臺所に備へたる味噌醬油酒醋より食戸棚にある種々の食品は數日を經過せざる中に變化を來し着ふるしたる衣類から帽子靴下駄等に至る迄大抵の家具には無數の微菌が發生いたしますこれを世間一般に微菌が生ずるといふて居ます此微菌は有機菌の繁殖して無數に集合したるもので其繁殖力は一時間幾萬増殖するか測

ることは出来ぬ位の速力でこれが種々の方法を以て萬般のものに傳播して更に廣く繁殖し其間に種々の事柄が出来るのである

斯く有機微菌が大繁殖をいたしますると同時に動物界の状態を見れば是亦有有機微菌界と同状態で動物に於きましても此季節は發育繁殖の好氣節で無限の小動物は到處に孵化繁殖して氣中には飛びまはり土地に草木に驅け走り人の家屋内に侵入するのみならず人体にまで寄生致します。此無限の小動物と無數の有機微菌との關係は如何と是に注目する時は始めて由り敷事態を發現するのであります。この二者の關係を述べる順序として有機微菌が繁殖する際の現象を記せば前既に述置さし如く細菌は肉類蔬菜菓實より酒味噌醬油等の食品に至る迄皆各嗜好する食品に寄生繁殖して速かに醗酵し腐敗せしめ臭氣を放散して小動物の嗅神經を刺激し誘導いたしますから群小動物は忽ち臭氣を逐ふて其腐敗物に集合し飽食満腹して去て又異香を

逐ふて他物に集り如斯く甲の汚物より乙にこの腐敗物より丙に轉々往來し其際毎に甲の微菌を其口や足肢等に附着して乙に輸送し乙の微菌を丙に送致し新鮮清潔なる丙は小動物の媒介によりて又微菌を宿らし腐敗する運命となります彼の蠅の如きは家の内外に棲息して戸外に有毒腐敗の汚物を此處彼處に漁りまわり戸内に入りて食物等に群集し戸外の有毒物や腐敗菌を附着せしめ偶人のこれを知らずして食用する時は恐るべき赤痢コレラ等の傳染病に罹るが如き或は蚊の如きは屋の内外に棲息し沼澤などの不潔物をあさりマラリヤ病體を附着し夜間人を刺螫する時はマラリヤ病に罹るが如き或は小兒など有毒菌の附着せる菓實を食ひ腸胃症を起し腦症を續發して數日間に生命を失ふが如き實例は世間乏しからずであります其原因は他に種々あるべきも不潔なる菓實を食せしことか一の動機を造りしは疑ひなきことで小動物と有機細菌相互の傳搬作用は衛生上大に注意して危險を



豫防せねばならぬことと思ひます  
有機細菌界下等動物界の夏季生活状態は已に説明  
を了りましたか進んで高等なる吾々人體夏季の生  
活状態は如何であるかといふに季候が暑くなりま  
すれば前日も御話致しました通り身體は溫調節の  
生理によりまして體溫の蓄積を防ぎ制滅せんとし  
て食物は其量を減少して多食せず皮膚は溫を放散  
せん爲め發汗は多くなり衣服は軽く薄さものを着  
け溫の放散作用を助けて體溫の高まるを防ぎます  
而して身體總ての生理機能は緩慢となり殊に胃腸  
の消化作用は冬日の如く多量の食物を消化する必  
要なければ大に消化力は鈍く食欲も減少し淡薄の  
食味を攝ります從て胃腸の食物に對する抵抗力は  
弱くなります腦神經の作用も緩徐にして動作も懈  
く倦怠を覺へ屢睡眠を催進し長時間熱心に勉強  
するに堪へません諸學校には夏期休業の設ある所  
以であります依て夏日の人間生活状態は消極的で  
前二者は積極的で其狀況を異にし活潑なる生理活

動を營まず殊に消化器の作用減弱し抵抗力の弱  
時である此消極的生活状態の時に冬日同様に多  
量の食物を攝取すれば其消化の成行は如何であ  
る腸胃かたるを惹起すは當然のことである況して  
此際彼の不消化物や有毒のもの不潔危險の疑ある  
ものが胃に入らば消化液は其毒力を殺す力なく消  
化器は其毒に抵抗する力に乏しく傳染病や急性症  
に罹りて倒るゝに至るは理の然るべきことであり  
ます  
以上述べ來りました話を單簡に約めて申せば夏期  
の衛生上に就て外界の下等有機動物界が積極的生  
活旺盛の爲め人體の消極的生活に侵入して害毒を  
逞ふすることがあるから其侵入を防ぎ害毒を撲滅  
することが夏期衛生の根本であると云ふのである  
尙終りに一つ参考の爲め申述たいのは有機細菌は  
皆人間に對し有毒有害である様に考られますが決  
して左様ではない或る細菌は有毒有害なるも或る  
細菌は有益にして吾人の營養物を製造する釀母菌

などもあり却て必要の微菌であります又多數の有  
毒菌は其成長を皆遂げるかといふに其大部分は風  
雨電雷や日光の爲めに殺され動物の食餌となりて  
死滅に歸しまする自然の巧妙なる作用はありがた  
いもので無暗に恐るゝには足りませぬ吾々人間の  
幸福でありましょふ併ながら餘り自然巧妙作用を  
難有がり依頼し過ぎて夏時の衛生を無視する時は  
下等有機菌や動物に襲はれ白旗を掲ることになる  
から注意防備は嚴重でなければなりません



## 夏の飲料

これは或る西洋の書物に出て居りましたのを寫して置  
きましたのですが貴嬢方一度試めして御覽あれ

### (1) ウィスキー入りのボンズ

ウィスキーを洋杯に一盞半

種類は何れにても御宅に有合せのものでよろし

レモン半個の搾り汁

白砂糖を大匙に一盞

氷よき程

先づ砂糖を水にて煉り置きさて用器に氷をかき此砂糖  
汁を入れレモンを搾り込み之れにウィスキーを徐々に  
注ぎよく交ぜて用ふ

### (2) 炭酸ブランデー

平野水一本

ブランデーを洋杯に一盞

氷塊

平野水を瓶の儘冷し置きブランデーに氷塊を浮べ十分  
に冷えたるとき氷を除き前の平野水を注ぎながら用ふ  
もつとも少量の砂糖水を加へて甘味を附するもよし

### (3) 梅乾入りブランデー

梅乾を好みの程を細く刻み濃き砂糖汁に交ぜ之れにブ  
ランデーに火を附け焔の上りたる所を垂らし尙ほ少量  
の熱湯を合せて用ふ之れは清涼劑にはならねど夏向き  
下痢症を治すと云ふ

## 罰と小児

是は近著の外國雜誌に見えたのを青木法學士が日本婦人誌上に轉載せられたるもの面白き餘あれば茲に轉載せり

家庭教育の上に於て、見逃す事の出来ないのは、小児を罰する事である、全體之の罰と云ふ事が、何う云ふ意味で世の中に許されて居るかと思ふ事が、大に研究しなければならぬ問題であるが、今はそんな六ヶしの事にまで立ち入る場合ではない。兎も角、家庭教育に於ても、又學校教育に於ても之の罰と云ふ事が附いて廻はつて居る事は明かであるとして、此から少し之の罰の研究をやつて見様と思ふ。

小児は何故罰せられるか、夫は云ふまでもない悪い事をするからである、悪い事さへしなければ罰せられる事はないと云ふのが普通の考へであるが、能く考へて見ると、是れは二つの意味に取られるやうである、即ち其の一つは惡事をさせない

豫防として小児に罰を示して置くと思ふ事、及び今一つは、小児が惡事をした報償として罰を科すると云ふ事との二つである。

之の二つの意味で小児の惡事を罰すると云ふ事の善惡は、今茲でやかましく論じるには及ばぬ、兎に角小児が不従順なれば直ぐ罰せられる、時とすると親が短氣の余りに我知らず小児に罰を與へて腹癒せをする事もある、例へば茲に立派な茶碗があると小児が誤つて之を取り落して破つてしまつたとすると、母親は其理由も正さずに「此の兒はまわ」と云つて突然其の子を擲る、其擲ると云ふ事にば何の譯もない、只擲つて腹癒せをする許りである、併し腹立たまざれに擲つて小児を泣かせた處で、其子に何か効があるか何うかと云ふ事は論ずるまでもない事である。

勿論そんな一時的の罰が小児に何等の効を與へる道理がない、一體體罰と云ふ事が子供に果して利益があると云ふ事は、實に疑はしい事で、擲つた

處で夫れであゝ自分が惡かつたんだと内心から後悔する様な事は、決して有るものではない、唯子供が悪い事をしないのは擲られると痛いから、それが恐さにしないのである、併し例へ子供が、虐待と云ふ上から云ふと許す可からざる事である、牛や馬でさへも虐待する事を許さぬ世の中に、可愛い子供を虐待して憚らぬと云ふ事は、母親としては余りに残酷ではないだらうか。

されば體罰を以て其の子の惡事を止めて、其品性を貴くし、罰を忍るゝ爲めでなく、悪い事は眞にしてはならぬ者だ、人は善い事のみをすべき者であるとかへさせ様と云ふのは、木に倚つて魚を求めると考へてもむづかしい事である、其の上體罰を行へば人に復讐心を起させる憂ひがある、復讐と云ふ事は人に取つて最も忌むべき性質である、何れにしても體罰の取るべき點は一點もないのである。

體罰がいけないとすると、精神上の罰は如何であらう、精神上の罰といふのは、體罰によらずして、心の奥から之れは惡かつたと後悔の念を起さしめやうとする時の仕方である、故に之の罰をするには、時かよくなければならぬ、手際上手でなければならぬ、又よく頓智がきかなければいけない、之の精神的に罰を加へる時には、忿怒と云ふ事が大の禁物である、カツと腹立て、前後の辨もなく加へる罰は、屢々害にこそなれ、何の益もない話である、

實際兩親が子供を育てる上に就いて、最とも注意すべき事柄は罰と云ふ事である、最も巧に罰しやうと思つたなら、其事に就いてのは非善惡を能く考へて後にしなければならぬ、之のカツと腹を立てた時に今一度考へ直す力は、時によると「何に罰する程でもない」と心を鎮める事もあるし、又さもなくとも、其罰する上に無理がない様になる者である、「子供を擲つたり、叱かつたりするが、

三十

悪い悪いと思ひながら、時によれば、あんまり腹が立つて、つい我を忘れてやる事が度々御座いますよ」とは、慈愛深い母親の、屢々口にする處であるが、之の「我を忘れて罰するのは極めていけない事である。」

又或る親になると、口で以て頻に威嚇して、子供をおとなしくさせ様と考へて居る人もある、之れも大なる誤である、子供を叱るに「そんな事をすると擲ぐるよ」とか「藏の中に入れますよ」とか云ひながら、其實は、少しもそんな事をしない、それでも初めの中は子供は之を眞に受けて止めるかも知れないが、よく其空威である事を覺るならば、「何に構ふもんかい、母様がそんな事しやしないんだもの」と多寡をくゝつて平氣でやつ付ける様になる、甘い母親の子が何うしても親の云ふ事を聞かぬのは、斯うして内兜を見すかされるためなのであらう。

今子供を處罰する上に就いて如何なる形式が行は

れたかと云ふ事を取り調べて見るに、國は多く時は長いから、種々萬般であらうが大抵左に擧げる様なものであると思ふ。

一、子供を口舌にて威嚇すること

一、打擲

一、禁足

一、絶食

其の外にも數多あるが、まゝ概括すれば之の中に含まるゝ者であらう、之れに就いて次號に少しづつ、説明を加へ様と思ふ。

從來行はれて居る罰の方法は、略前に云つた通りである、一體を云へば、子供を罰せなければならぬ様になるのは、親の育て方に何等かの缺點があると云はなければならぬ、子供を罰するに就いて親が少しも責任がないとは云はれぬ、子供は少しも罰を受けなくてもよい様に育てるのが親の責務である、夫れ故に子供を罰する時に、親が一概に子供許りが悪いと思ふのは間違ひである。

口で喧しく云つて罰することは宜しくない、これは前にも云つた通りである、親は腹立たずに、我が子に對して惡口雜言を放つ事がある、又ありせぬ事を云つて威嚇することもある、是等は何の効もないのみならず、偶々以て、其子に反抗心を起させ、或は又親の云ふ事が嘘であると思はしむるに過ぎない、叱ると云ふ事は、彼等を悔悟させる爲めであるからして、叱る時にはよく注意して、物柔しく、道理を聞かせ、親の慈愛と、物の道理とに責められて、心から悔悟する様にしなければならぬ、大聲で怒鳴り散らしたからとて、直るものでない。

時としては悪い事を爲た子供を怒りに任かせて打擲する親がある、是れも何の甲斐もない、却て有害である事は前に云つた、子供が惡事をしないのは擲られるのが恐さからで、何故してはならぬかと云ふ道理に責められてはならないとすれば、夫で子供が立派な品性に育て上げられるとは云はれない。

三十一

い、丁度犬や猫が人の居る前には、何もしないが、人が居ない時になると、盗み食をやるのと全様である、實際子供の中之の様な悪い癖がある者が多いのは、大部分、此の様な育て方をされて居るからである。

又悪い事を爲たからと云つて、食物を禁ずる親がある、之れも余程思ひ違ひである、子供の惡事と小兒の營養とは何等の關係がない、子供が悪い事を爲たからとて、食物を食はずに居られる者ではない、親は斷食の苦しい思ひによつて惡事を廢めさせ様と思ふのであらうが、よし一時たりとも、營養物を欠かせるのは、子供の發育上に大なる害がある事である、子供は發育の最も盛なものであるから、之の時に營養不良などの事があつて、夫れこそ終生に害を及ぼすものである。

夫れから禁足で以て惡事を止め様とする者もある親が子供に向つて「悪い事をする」と藏の中に入れて」と云ふて聞かせる、又實際に藏の中に入れて、

泣き叫めくをも構はず、二時間三時間もうつちやつて置く事もある、之れも大に考へものである、何故なれば、土藏の中に入れるのに、單に禁足をして子供の遊び戯れを止めると云ふ上に、一種の威嚇を意味して居るからである、即ち暗い土藏、お化けの居る土藏など、云つて、子供に充分恐がらせて置いて、そこで其の厭な、恐い土藏の中に投ずると云ふのであるから、斯様な事が幾度も續く時は、其の子供は恐怖の癢がついて、萎縮して仕舞ふのである。

併し兎に角、子供に取つては禁足と云ふ事は大の禁物である、他の子供が戸外に嬉々として戯れて居るのに、自分は四疊半の室内に静座せしめられて居るのは如何に苦しからう、小兒のみならず大人でもさうである、初夏の交に獄中にありて、友人が愉快に旅装を調べて、漫遊に出かけるのを見ては、大々的の苦痛を感じざるを得ないであらう、この苦痛は中々忘れない者であるから、罰の

上には多少の効はあるだらうと思ふ。

のみならず、發育盛りの子供は身体に元氣が充滿して、きびくと發するものである、其の盛な元氣が知らず／＼發して惡戯をする様になるものであるから、一時室内に静座せしめて、其の元氣を落ち付かしめ、其の上に於て静によく、云つて聞かせるのは子供の罰としては最も適當であらうと思ふ、現今小學校などでは、重に之の方法によつて居る様に思はれる。

序に子供の罰に就いて、昔は如何な事が行はれたかを調べて見るのも一興であらう、「フエヤー、チャイルドの家族」と題する百年前の宗教的家族生活を書いた書物の中に、其時代の子供を罰した事が書いてある、讀んで見ると如何にも驚くべき事である。

主人公はフエヤー、チャイルド氏で、二人の子供がある、長男が九才、末子が六才である、之の二人の兄妹が喧嘩をした、捻つたり撲つたりした揚

句、長男の「ラツキ」は氣六つかしやの「エミリー」嬢を呼んで、お前なんぞ可愛がるものか」と云つた、之れが忽ち主人の耳に入つて二人共に次の様な罰を受けた。

主人は先づ棒を以て、子供等の手を滅多打にした、子供等は痛さに堪えず悲鳴を上げる、罪と云つたつて子供の喧嘩だ、そんなにしなくてもよござうなものだにと思つて見て居ると、何ぞ知らん、是れがほんの罰にあふ入口であつた、續て子供等は晝食を禁められた、飢しい腹をかへて、直立のまゝ散々説法を聞かされた、夫れから、晝尙暗き森の中に引いて行つて、疲れたとも云はず長い間彼處此處と引き廻はされて「お前等に今に、兄妹喧嘩して死刑されたものを見せてやらう」と云つて、奥へ奥へと連れて行かれた。

森の最も奥に達した時、其處に古い絞殺臺がある、一人の男が殺されて居る、其の前に立たされた子供等は恐さに震ひ慄いた、父は其前の切株に腰打

ちかけて、兄を殺した恐ろしき話を聞かせる、子供等は泣き聲を上げて立ち去らんと願つても許さない、遂々凄い、話を終末まで聞かせた、秋の身を切る様な風が、颯々と森の梢を渡り、木の葉を吹いて、絞殺臺に當ると、臺の鎖鏈が憂々と響いて、死骸は右に左に動く、凄々と云つたらない、之の中に子供等は我ががなせる僅かの罪の爲に、飢しい、寒い、恐い、凄い思ひをなして長時間立されたのである。

今から考へれば、「フエアーチャイルド」氏の之の方法は、小兒虐待防止會から公訴らるべき性質のものである、がその時代には之れで以て、最も優しいか父様であつたと云ふ事である。

終に於て子を持てる親達に申し上げる、子供が罰を受けなければならぬ様にするのは親の技倆の足らぬ處である、子供は罰の必要のない様に育てなければならぬ、如何にして子供を罰しやうかと研究するのは夫れは親として残酷である、如何したら罰の必要がないだらうかと云ふ事を研究して頂きたいのである。





# 割烹

石井泰次郎

おらんだ煮あへ

(原料) こんにやく、にんじん、椎茸、午房、胡

麻油、味噌、砂糖、醤油、酢、ねぎ

こんにやく三枚(一枚の大きさは厚さ五分、長さ六寸五分、巾二寸五分位)をとり、一枚を二つづゝにへぎ、端より、成るべくうすく切り、鹽をふりかけてよくもみ、水をかけて洗ひ、箸などへ上げて水を切りおくべし、

にんじん(西洋にんじん中位のもの六個は皮をむき、横に二つに切り、一寸或は一寸二分位のたけになる)それをほそく線に切り、水にて洗ひ、水を切りおく、午房(二尺二寸位の長さのもの六本)

は庖丁刀のむねの方にて皮をこそげとり、薄皮庖丁にて、左手にて午房をまわしつゝ、けづり(さゝがすなり)水にとりあくを出し、水をかけてよくさらし、次にこれも水氣を切りおく、椎茸(二合)は水に浸してやわらげ、次に湯煮して取りあげ、莖をとり、ほそく切りおく、味噌(五十匁)は搗盆に入れてよくすりうらごしになしおくべし、

さて、鐵鍋に胡麻の油三勺ほど入れて火にかけ、烟の立ちのぼるを度として前のこんにやくをいれ箸にてかきまわしつゝよくいため、皿にとり、又胡麻の油を入れて、にんじん、午房等をいたむべし、次に、油煎にしたる、こんにやく、にんじん、午房、及び湯煮したる椎茸、こしたる味噌、砂糖三十匁、醤油三勺等を共に鍋に入れ、木杓子にてかきまわしつゝ煮、少し煮て、酢三勺ほど加へ、向も煮て、皿にとるべし、ねぎは、小口より、うすくうちて、水にてさらし、

右の煮たるものを盛りたる上へばらりと置きて出すなり

鹽松風(菓子)

(原料) メリケン粉五十匁、砂糖五十匁、ベキン  
グバター一匁、鹽一匁、水八匁、しその葉少量、

メリケン粉はかたまりのなさをやう金ふるひにてふるひ、砂糖もおなじこまかさ金篩にて、木杓子にてかたまりを押しつぶし押しつぶしてこし、共に深みある大皿に入れ、ベキングバター、鹽、等を加へてよく合せ、次に水八匁を少しづゝ入れてとろ／＼になし、(水を入れてよりはあまりかきまわさぬ方よし、あまりにかきまわす時はメリケン粉のねばり氣いでゝあし) 蒸籠の中に、四角の折の底をぬきたる、まわりのわくのみを入れ、其中へ布巾を敷きあき、とろ／＼となしたるものを其中へと流し入れ、よく煮立ちたる湯鍋の上にかけて、強き火にて二十分間ひすなり、十分間た

ちし時、蓋をとりて、紫蘇の葉のこまかくきざみたるもの(ゆかりといふ)を上へばらりとふり入れ、蓋をして、又十分間ひすなり、取出して布巾をのぞき、程よく切りて皿に盛るべし  
ベキングバターとはふくらし粉なり又メリケン粉の代りにうどん粉にても同じなり但しうどん粉にてはメリケン粉より色黒くなるなり

●下女下男の給料調べ(或人の調査)

長徳高京大新神廣松下東横水

崎本島知阪戸島關江京濱月

下男 四四四四四四四四四四  
〇〇五九五五五五〇〇一〇〇  
〇〇〇二〇〇〇〇〇〇〇七〇〇

下女 二二二二二二二二二二二二  
五五五三〇八〇七〇〇五〇〇  
〇〇〇三〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

京都高長富新仙秋青函  
宮知野屋山澤濁田森館

下男 二二二二二二二二二二二二  
〇〇五〇五〇〇〇五〇五〇五  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

下女 二二二二二二二二二二二二  
五五五五〇〇〇〇二八五  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

雜吟二十句

鹽野 奇零

麥刈に急ぐ男や馬曳きて  
此處彼處朝餉の煙や若葉越し  
睨て顔洗ふ流しや杜若  
更衣京へ行かんと思ひけり  
水に浮く藻草の上や初ほたる  
軒下に風呂を焚きけり麥の秋  
駄菓子賣る店も留守なり田植時  
田勞れの馬撫でゝ居る新樹かな  
植へる田やよき日撰みて門田より  
山越せば乳母の在所や鯉のぼり  
古寺に木魚の音や蚊のうなり  
まいことの薙に並ふ薔かな  
風ほめて腰にさしたる扇かな  
髪結ふて簞笥あけけり更衣  
蓄して土をかへけり白牡丹  
日の暮を牛の子遊ぶ夏野かな  
夕暮や池の葦間に飛ぶほたる  
菅笠の古びて見えぬ五月雨

涼しさや登りつめたる峠坂  
螢狩親しき友と河一と重

捨子の歌

めぐみの母に抱かれて、  
あたりを暗き闇にして、  
只我一人廣き野に、  
草の褥の其の上に、  
母の胎内出でしより、  
かゝる憂目に遇ひにける、  
鬼にも勝ると言ふべけれ、  
さはさり乍ら恨みんや、  
人より生れし我なれば、  
折しもそよと吹く風に、  
いともつめたく我顔に、  
驚き大空見上くれば、  
我を招くが如くなり、

つゆたけ  
ちゝのむ夢はさめ果てぬ、  
母は何處へ行きにけん、  
襦袢に身をば纏はれて、  
未だ幾日ならずして、  
我が親達の心こそ、  
己が糊口もなしかぬる、  
是非なき事とあきらめて、  
葉末の露のちりかゝる、  
笑を含める明星の、

# 大陸のおさんどん(承前)

## フ ラ ン ク

食堂をすましてのちは、鑿と槌とはわが武器となり余はバケツ片手に倉庫に下りゆき氷室の中に飛びこむのだ、この寒中ではまことにありがたすぎる仕合せ、八寒地獄の標本 活人畫で見せると云ふ格、山の如き氷山あり鑛山夫宜しくと云ふ、勢にて氷片を碎きとり、御丁寧に一々それを口に入れる位に碎くのだ。どうしても一回に二斗位は必要だ。氷の刃にて傷つけらるゝは幾度あるかしれねどすでに感覺を失ひたるわが手には、何とも答へぬ、片々紅を染めいだすので、オヤこゝにわが手が御出かいナアと云ふわけ、寒熱の地獄に通ふ茶びしやくは、心なければ苦みもなしと氷片を口に茶禪一味のはゝゑみをもらすこともあるこゝには上に送管すべき麥酒樽の五六冷やし置く

のみか、コック用の牡蠣、蝦、蟹などを貯藏して居る。

出来あがりし氷片を酒保にわたし、吾は次の仕事に急ぐのだ。酒保にてはこれをシャンペンの冷掩に用ゐる又はウキスキーのあとの水盃に投ずるのだ。

九時半或は十時頃朝飯をしたゝめるのだ、凡そその日の献立のうち何れにても注文することが出来る肉喰はぬ身にもそれぞれ要求のなきにあらず、わがチャーレーは健在矣、今日はサラダにオムレツ、カドフェシユのボールが出来ますかと、吾ながらかくも生嗅くなりさがりたるものかな、好笑好笑。

オヤ忘れてゐたと紳士室の電池を検査しなくてはならぬと、食半ばにして立ちてゆく。日本ならば煙草盆と云ふべきところ、こゝにはピストル形の火器一ツ折り曲げると電氣にて點火するやうに出来てゐる。その元じめのところにはガヤスリンを

充て、電池の裝置もほどよくして再び食卓につく。何たるのろまな給仕人ぞ。今ごろまで芥子やわさびの切り盛りをして、鹽に胡椒よと忙はしげに仕度してゐるのもある。客はそろそろ來て居るでないかそして第一の珍客様ミストルフランク是にあり、早くしろよ不景氣なと、肩一つ叩きて吾は食卓を立つてゆく。

再び氷室にゆきて大なる氷片を運び來り、給仕人のためにはバターに冷やすため、ランチ係のためにはランチメールを冷やすため酒保のためには氷室の酒瓶のため、一々供給してやらねばならぬ内部の仕事はあらかた終りとなつた。これより戸外に出で、磨きものをするのだ。カアヘいと云ふはフランスぶりなる意氣な料理屋のことにて、酒屋とレストランとを兼帶せるを云ふものださうな、そのサルーンには必ずありと云ふ戸外の眞鍮飾り、こゝにもありがたく存在してゐる酒保の入り口には騎兵の服の飾りのやうに眞鍮の棒二十四

本ぞならべられたる、それが裏と表とにあるからいろは四十八本ぢや。ふみ段にも眞鍮あり、看板も例的だ、おまけに女性用の戸には大和鏡のやうなヤツが光つて居らねばならぬ。十一時半まではこれ等と組みうちする。

十一時半よりは庖厨と棚一つへだてたるパントリに入りて働くのだ。こゝはまだ大暑炎天と云ふ氣候、ケツチンのストーブは酔ふて怒つた關羽のやうに赤くなり、肉をやく烟は濃々して立ちこめ四人のコックはわがチャレーを將として大刀に肉を屠るもの、車を廻して卵をベークするもの粉を捏めてミンスパイをつくるもの、芋をくだきてマツシをつくるもの、一寸のすきまなく働いて居る、十余人給仕人は皿をさへげて往復し、洛陽の車馬絡繹織るが如しと云ふ態、命ずる聲應ずる聲、活氣を飛びこえて殺氣を帯びてゐるのを笑止なれ。かなたには同胞二人の皿洗ありて一日十一時間ひたすら皿を洗ふてゐる。ヤア君、今日は馬鹿に多

く來やがるナア、中々忙はしいよ、チト雨でもふると客足が減するから閑になるがナアなど勝手なことを云ふてゐる、抑この皿洗はアメリカ苦行の初門と云ふところ仕事は單純で言語は不用と云ふので、渡米最初の人に多くある働口でわが友二人もまだ十七八の少年である。きけば母國を船出してよりまだ三ヶ月とか四ヶ月とか、吾れは知つたかぶりに通辯となりてコツク輩の奇談百出を紹介するも慰藉の一つを與へたいばかりである。

吾はこゝにゐて珈琲なつくらねばならぬ。

ミルクを沸かさねばならぬ。バターを切りて供給しブレードを切りて送りだすのだ、グレーの種類三、ホワイトブレードと云ふは普通のもの、グリーンブレードと云ふのは色くろくして、山椒にて香を添へたもの、ボンボニケリーとか云ふのは今一段色黒くして、蕎麥のやうな味するのである。西院の河原のいとし子の、石つみ花つむやうにテールにつみならべ、一寸と見ぬうちに給仕人は

悉くもつてゆつて仕舞ふ。中々の繁盛である。食堂の方は一日千人以上は何日でもある土曜日曜は二割増、酒保のみの客は千を下りしことはないとのこと、吾はかの音楽をきながら銀器を是處にて洗ふのである。スプーンとナイフとフォークと熱湯の中に投入したるを武内宿禰式にとり出して淨巾にて拭ひそれぞれ仕わけして函に入れる。洗ふ上から投入する、入れる下からもうだすと云ふ早業、唯見る白魚の船べりに去來するに似たるを、その間に棚の上なる皿を乾燥棚の中に入る、も一役だ。皿は到底拭ひきれぬ故水を切りてギヤスにて熱し乾かすのである。

レデイの前にては上品な言葉ずかひに飽きはて、かこゝに入り來るや否やウエタの惡口雜言さくに堪へぬ。はては戯れの言ひ草に花がさきて本もの喧嘩となるも珍らしくはない。業報人、這畜生の流丸に觸れて吾とても幾度か夜刃の眞似をしたこともある。竹影櫓を拂ふて塵動かす、月深潭を

穿ちて水に跡なしなど古人の必要をこの間に味ひたいものと勉めたのである。午後一時にはこのバントリー専門のわが友は来る。A生と云ふので明朝の一時までこゝにて働さづめをやるのだ金無垢の指環をぬきとりて、一寸と裏に掘りし文字を見てくれなど云ふハイカラ男優さ男真紅のネキタイに流行のピン、黒のパンツの折目たゞしくホワイトコートと眞白さ襟に、カーネーションをさして居る。

吾は後住に什物を引つぎて、チャーレーを訪れその氣焔をさへながらわが晝食の出来あがるのをまらて居るフランク、君も早くコックになり玉へ、どうだ僕を見玉へ。一日九時間ばたらきで六弗はエライぢやないか。一週十弗位で満足してゐる君や給仕人など憐むべきものだネー。サア一杯を買ふてきてくれ玉へ。麥酒の大盃をさした一日六弗のその二弗位はこゝにて酒代として仕舞ふのである。あとの残りも宅まで無事で持ちゆかどうか

か怪しきもの、レストランドばたらきするものはウエターにせよコックにせよ昨週は北街に今週は南街にと、ところさだめ放蕩してゐるのだ。その魚河岸的氣性のうち面白ところもないではないが金をつくり、金を費す、縞の財布の生人形の外何等の能もないのも憐れな話、ともかくも吾には上等の御料理をくれるうちは厨夫長はよい人の部として置かう呵々。

食後若し雨なくば市街の日よけを下ろし、人道を掃き客の一時退潮となりしを見はからひ食堂を掃くのである。白砂をまきちらし居る上を等輕く提げて、繪師が藁筆つかふやうにしの字しの字と書きながら掃くのである。これならばよしや五人皿にすがりて残り居るものあつても塵もたゝず不調法もないではないか。

ア、今日の仕事もはやくだり坂となつた。電燈の塵でも拂はんかと、かの女性御用の食堂にゆつて見る。咄々怪事、掲示は偽善の看板にして、レ

デイたちはジンやウキスキーやを痛飲して居る。

ブランドーを傾けて居る巴御前も居る麥酒をとりはじめてから三時間、未だ去らずに居ると云ふ板額刀自も見ゆる。はじめは臙脂の花唇可愛らしく紙管にて呑んでゐるが、紅臉いよゝ色づきそめては嬌舌の呂律狂ひ友と酒盃を高くさしわけ、憂として相ふるゝところ、ハイカラと蠻カラとの追分峠、これより下りては余り淺ましく筆にものぼしがたいのである、かくても酔を電氣仕かけの扇の風にさまし、化粧室の二十分、虫もころさぬレデーとなりすまし、オペラグラスを高い鼻の先にかざし、纖手重げに裳をうしろにかゝげ、進歩ゆるゆる運ばせ玉へば、ゆさ合ふ二等人間の男子だち帽を脱しての御挨拶、そはアメリカのありがたところなるべし。これはしたり讀者の多數は御婦人がたなるものを。妄言多謝、

残れるタイムを埋めんがために、吾はウエターの二三と椅子に坐して、ペーパーナプキンを摺むは

常朝來はじめて腰を下ろしての仕事、ウエターの多くは獨逸人であるから、かゝる時こそと半熟のジャマンを仕用して見る、とかくするうちに五時に二十分ばかりとなる。すこしするしかたであるがそのタイムを食事に費してカツキリ五時におさらばをするのだ。

この芝居は、○六年の十二月六日に蓋をあけ、○七年二月十一日に千秋樂となつた、すこしく健康を損じたる上に、日曜とてもなく毎日同じことのみくりかへして居ることの余りにも無趣味にて飽きはてたからである、

幾十冊の書を買ひ得た外、さしたる貯蓄も出来なかつたが、家庭労働に比して氣骨の折れざること無類、皿一枚割りたりとてマダムの二十分の説教をさくなどのことはこゝには昔の夢の如く思はるゝばかりである、二千余個の酒盃、一日に五個六個は誰れとなしに破るもの、その硝子屑を入れるゝ箱をそなへて置くなどは面白いではないか。



すべてが自由の空氣にみちて、氣に入らなければ二日にして去るもあり、去りたるものは去るにまかせ相談熟せば誰れにても新たに雇ふ。何等の情實も何等の遠慮會釋もないのである。大陸のなど、大袈裟の戯題であるが、そのノンキなところとはたしかに島國根性を治療するによかつた。廣間の壁上、次の獨逸文が掲げてある、お客様だからとて低頭平身するわけでない、云はれ相互の便利のため働いて居るばかりと云ふ鹽梅。

踵の踏みかたさだかならぬとき、腦の工合變チキリンなとき、分別はピアの泡のやうに高く溢るゝとき、足はつかれてふらふらするとき、聲の響の夙井ならで大なるとき、ソラ見ろ、それが酔ぱらつてきたのだ。汝泥醉漢、三千里外に疾走し去れ。疾去、疾去、勿得久住、急々如律令。

かくても三日に一度位は室の片すみにて、酣睡雷の如きことなきにしもあらず、曹孟德猛然として

立ち、鐘鬼の小鬼を提ぐるが如くこれを戸外に放ち足げにして仕舞ふはかゝる時である、食卓にくものにして一回壹弗以下の拂をするものはないのであるが、壹弗だして踏まれてかへるは情ないことだとフビンにも思ふ。ともかくも時間の正確なると職責に訴ふる外小言の發信局なきとは余の大いに氣に入つたところであつたどうしてもケチンに腐れ縁あるものかこの頃は一級昇進してコックとしやれこみ、王府を去ること百五十里に舞臺ヅラを晒らして居る。何れそのうち何等かの脚色となつて御ひいささまがたの喝采を得る時があるであらふ。先づはこれでチヨンチヨン幕。





## 「只今」の夢

硯山人

或村の百姓家に作藏と云ふ男の子がありました。  
 此子は誠に可愛らしい、よい子でありましたが唯  
 一つ不思議な事にはお父さんがお呼びになつても  
 お母さんが御用をお仰つてもいつも氣嫌よく「ハ  
 イ」と返事をしながら容易に行きもせず爲もしな  
 いで自分の勝手な事をして遊んで居ると云ふ不精  
 な子供でした。  
 或日曜のことお母さんが臺所から納屋の前に遊ん  
 で居る作藏を呼びかけて  
 母作藏や、御苦勞だがね山へ行つて松葉を一抱  
 持つて来てお呉れよ」とお仰つた。  
 スルト作藏は例の通り機嫌よく

「作、ハイ、只今！」と然も快地よく大きな聲で返事はしたが、サテ一向行き出さないそして相變らず自分勝手な遊びをして頻りと蟻の行列を眺めて居ました。其中に之も倦きたので裏の畑から向ふの小川へと出掛けて目高を逐つかけて遊んで居ましたのもうお母さんの御用などはすっかり忘れてしまいました。

其中に日は段々高くなつてお正午も過ぎた様なので、お腹は飢つて来る、暑くはなつて来たもので、すから家へ歸つて見るとお家はからつぽ、お父さんもお母さんも野畑へ行つて居ない。戸棚を開けて見るとお香の物が皿の上に乗つて居た。先づ之を持ち出してそれから茶碗にお箸と次にはお櫃とを出して漸く御飯を濟ませてしまいました。さて是から何うしたものか、何をして遊ばうかな隣の吉ちゃんのところへ行かうかしらなど、考へて見ましたが根が不精の作藏ですから勢よく出掛もしないで柱に寄りかゝつて考へて居ましたスルト

何處からともなく二三人の子供が何かべチャクチャ云ひながら家の前を通る様子です。誰が来たのか知ら吉ちゃんならいゝがそれにしても聞きなれない聲だと思つて居ると

「甲、オイ、今行くよサン、此處の家を御覽んよ此處が「只今」」と云ふ子供の家だよ、のぞいて見様か只今が居るかも知れないから」

今行くよ「ア、ソー？ 此處かへ、大層立派な家だね、それはソーと只今が居たら連れて来いと大王様がおしやつたんだから居たら連れて行かうぢやないか、ネ今直サン」

今直「ア、ソーしやう、やあ居る、今行くよサン御覽よ只今が柱に寄りかゝつて寝て居るよ丁度いゝから早速連れて行く事にしやう」

と二人の妙ちきりんな名前の子供がヅカ、と入つて来て何をするかと思ふと蜘蛛の巣の様な糸を卷いた糸巻を出して先づ第一に作藏の口を縛つて何も云へない様にしてしまつた。それから手と云

はす足と云はずグル／＼と皆巻き上げてしまつたのでまるで、蜘蛛の巣にかゝつた蛇よろしくと云ふ有様で作藏は何うすることも出来ません。

やがて仕度が出来ると二人の怪物はエンヤサと作藏を擔ぎ上げて家を出たかと思ふと風を切る様に飛んで行く様子です、何んでも餘程早く驅けて居る様子ですから何んな處を通るのだらう見たいものだと思ふつて目を開きましたが目の前は蜘蛛の巣でさつぱり何が何だかわからない。少しは糸の隙からでも見えそをなものであると思つて頻りに目ばかりをしますけれど巻き付けられた糸が澤山なので隙が出来ない、其中漸く少しの隙間が出来たので一寸下の方を見ると下の々々すうつと下の方に家の屋根や大木の先やらが見えてそれが丁度瀝車にでも乗つた時の様に後へ／＼と走つて行く様子です。今作藏は雲の上を風の様に早く飛んで行く處です作藏は見るからにゾットして目も何もつづ

つて縮み上りました。何んでも百里か二百里飛んで來たと思ふ頃二人の怪物は雲から降りて作藏を地べたに下しました。ソット目を開いて見ると大きな岩屋の前です。作藏は何うなることかと心配で怖くて仕方がありませんが聲を出すことも泣くことも出来ませんからちつとして居ると頓がて四人のものが出て來た様子です、

甲 オイ／＼今行くよサン、其縛つてゐるのは只今かへ、

乙「僕の級に入れて遣らうか「少し待て」サンが悦ぶよ」

丙 ナニ「も少し」サンの組がいゝよ、あそこには「後で」サンも居るからなんて話して居ました。何の事やらサツパリ解りません

作藏「誰も／＼ナンテまわ不思議な名前だらう」と口の中で云つて居ました。スルト奥くから一人の怪物があらたゝしく出て來

と何でも自分の名前を續けざまに讀んで居る様で

は我<sup>われ</sup>知らずビクリとしました。

行くよ「ハイ、連れて参りました、此處に縛つて置いて御座います。」

大王「ドレ、調べて遣らう、糸を取つてしまへ」と云ひますと先の二人は出て来て今迄縛つてあつた糸を取つて呉れました。

大王「成る程是は不精そーな顔して居る。怠けものに見えるなと云ひながら作藏の頭を捕へて頭の先から足の先迄見廻はして、

大王「お前はお母さんが御用をお仰しやつた時に何と云つて怠けるかなと云ひました。

作藏は返事をするのもいやですけれど大王が捕へた手の拇指が如何にも痛いので獨りで口を開いて

作藏「ハイ只今」と申しますと云ひました。

大王「ハハア、そーだらう、夫れだからお前の名は只今と云はれるのだ此處はノンベンガラリの國と云つて何んでも、今直に」とか「今行くよ」とか「只今します」とか「一寸待て」などと云つて置きな

四十八  
から容易に實行しない不精もの丈が集まつて居る國だからお前の様なものが居るには至極よい處だお前はもを家へなど歸らんでもよからう、と云ひました。

作藏は今にも泣き出しそをな顔して

作藏「大王様も是から無精には致しませんから何うぞ母さんの處へ歸して下さい」とお願いしましたが大王は大きな顔を横に振つて

大王「イヤ／＼そんなことでは歸せない、お前の爲る／＼がわてになるものか、今日は兎に角此處の無精學校へ入學しなければならぬ、そして今日は初めてだから百遍で我慢する、お前の好きな處に立つて大きな聲で自分の名只今を百遍讀め、聲が小さいと幾度でも遣り直させるぞ」と云ひ付けて大王は亦も、グシン／＼と地響さして奥へ行つてしまひました。

作藏は不省無精に一つの列の端に立つて泣き聲を張り上げて外の子供と一所になつて

四十九

雜 錄

● 本會第四十五回 常集會

緑の蔭なつかしき六月第二土曜日東大久保なる高千穂小學校附屬幼稚園に於て第四十五回 本會常會を開く。遠路午後二時とはいへ集まりの人数の數如何にやと慮ひしにもかゝはらず四十名近く此靜かにして一つの主義ある宏き校舎の中にあつま

られぬ時刻もたがへず。

入口より可愛らしき女兒三四名出で、應接せられたる日頃幼兒の世話にのみすぐせる人の今日のみは兒童の清き接待をうけ先づ得いえぬうれしさに場に導かれぬ。

開會の辭についで保姆合唱の唱歌あり中村主幹の遊嬉につきて向後保育者の注意によりて種類多くあつめ得るなるべし次又三回と此集會を利用してその各兒の間に行はるゝ遊嬉の面白きものを撰

擇しては如何との御話あり川田同學校長の學校設立の趣旨につきて話ありなほ教育するものらに保育の重任を負へるもの虚心平氣に幼兒に接し日本國純粹の氣風を養成せん事を御互に心掛たくと挨拶あり後會員若干名にて夏は來ぬの唱歌あり茶菓にうつりて全校學報其他の分配をうけよき參考とよろこべる折柄にその學報中にある『夏休み』の唱歌を電車唱歌の曲にあはせてさきの兒等の歌はれたる一しは耳傾けられしか、後校舎を案内せられたるにくはしく參觀し解散したるは午後四時すぎなりき。

なほ全校は寄宿舎を設置しあり校長家族と共に舍内に住居し且つ保姆を聘用し父兄の依頼に應じ家族制によりて其子弟を養成監督せられつゝあり自宅より通學するもあれどその舍内にあるものまだ五つ六つの幼稚園時代の兒より十二三才までの兒等の起居晝夜分かたぬ保護校長并に夫人の献身的の事業ならずしては今日の結果は得られざる事と



信じてはその此校舎内に眞に教育をうけつゝある  
 兒童の幸福幾何ぞや思ひ遣るだに嬉れしき限なら  
 ずや。

●帝國教育會夏期講習會 本年の講習科目は教育、國語、化學、植物、教育、衛生、家事の六科にして化學は東京高等師範學校内にて開講し小學程度の實驗法を示す筈

教育學八月十五日より廿四日迄講師森岡常藏氏、國語八月八日より十四日迄文學士保科孝一氏、化學九月一日より十日迄理學士小川正孝氏、植物八月一日より七日迄理學博士齊田功太郎氏、教育衛生八月一日より十日迄醫學博士三宅秀氏、家事八月十五日より二十一日迄宮川壽美子氏なり

●基督教女子青年會夏期講習會 來る七月十二日夕より同十八日まで東京青山女學院内に第二回夏期講習會を開く由

題目は聖書研究、青年會事業研究、各種講演、祈禱會、懇親會、音樂會、茶話會等にして講習料は五日分三十五錢滞在費(食料及寄宿費)一日分四十五錢位なりと照會は麹町區土手三番町十五基督教女子青年會事務所へ宛てらるべし

●東京府教育會女子夏期講習會 八月一日より十日迄神田橋外同會講堂に開會科目及講師左の如し

教育(前田捨松)國語(杉敏介)理科(堀田要三郎)遊戲体操(佐藤喜志太、乙訓鯛助)

●女子体操音樂講習會 前號に記載したる如く愈々來七月二十一日より八月十日まで三週間九段下体操學校女子部内に於て國語、教育、生理をも兼修せしむる由

講習科目及時間は普通体操(凡二十時間)遊戲(二十時間)高樂(凡十五時間)体育理論(凡八時間)教育附体操教授法(凡十六時間)國語(凡十時間)其他科外講演あり講習料は金參圓

●女子農藝講習會 千家男爵夫人の會長たる婦人農藝會が會旨普及の爲め無料にて夏期講習會を開催(廣告欄参照)する由は屢々記載せしが尙同會は地方より上京する女子普通下宿屋に投するを欲せざる者には同會評議員秋間爲子氏監督の錦秋女塾に實費にて寄宿せしむる都合なる由

## 編輯記事

本月中旬より暑中休暇と相成候へども本會へ宛御用の方の信書等は矢張り女子高等師範内本會宛にて差支御座なく原稿も同様に願上候尤も係幹事毎日は出勤致し申さず候に付御照會等の場合には御返事多少遅れ申可く候に付此儀豫め御涼知下され度候前號に投書せられたる肥前入宮崎北洲兩氏の御住所書編輯員の不  
 注意にて取り失ひ申候何卒一寸御知らせ下され度願上候



會費領收 (自明治四十年五月二十三日  
至同六月二十九日)

金額 年月日

三〇	四〇、五——七	加藤 眞
一二〇	四〇、一——一二	桑邱ます子
六〇	四〇、三——八	宇式かん
一〇〇	四〇、一——一〇	石橋つね
一〇〇	四〇、一——一〇	下瀬たつの
一〇〇	四〇、一——一〇	岡みやこ
一〇〇	四〇、二——四一、九	曾野 菊江
一二〇	四〇、一——一二	進藤 つる
一二〇	四〇、一——一二	西村 もと
一二〇	四〇、五——四二、四	妹尾 セイ
二〇〇	三九、一〇——四一、五	柳澤 てる
二〇〇	四〇、四——八	長谷川 ちか
五〇	四〇、一——五	川島 庄一郎
九〇	三九、四——三九、一二	齋藤 鹿三郎
一二〇	四〇、六——四一、五	京城居留民團役所
五〇	四〇、一——五	海寶 ちば
七〇	四〇、六——一二	相賀 よし
五〇	四〇、四——八	大山 ちよ
五〇	四〇、六——一〇	伊藤 ぎん
五〇	四〇、四——八	片桐 くら
五〇	四〇、一——五	大澤 まさ
六〇	四〇、一——六	小原 藤枝

一〇	四〇、六	遠谷 あき
一〇	四〇、六	鈴木 まさ
二〇	四〇、六——七	島村 やそ
七〇	四〇、三——九	今村 琴猪
五〇	四〇、三——七	飯沼 しづ
三三	四〇、三——五	長尾 瀧野
一二〇	四〇、一——一二	町田 孝
一七〇	三九、一——四〇、五	大室 ゑい
三〇	四〇、一〇——一二	立花 せん
四〇〇	三八、八——四一、二	人見 よし
三〇	四〇、四——六	岡田 みつ
三〇	四〇、四——六	富岡 龜門
三〇	四〇、四——六	鳥居 鐵三郎
三〇	四〇、四——六	喜多見 さき
三〇	四〇、四——六	波佐谷 みち
三〇	四〇、四——六	伊藤 弘一
三〇	四〇、四——六	小池 みつ
三〇	四〇、四——六	佐伯 外濱
三〇	四〇、四——六	市原 すみ
三〇	四〇、四——六	金子 まき
三〇	四〇、四——六	下村 三四吉
三〇	四〇、四——六	武田 きん
三〇	四〇、四——六	谷田 部順
三〇	四〇、四——六	町田 則文
三〇	四六、四——六	山口 西三郎

森 岩 太 郎	四〇、六—七	三〇
廣 田 時 三	四〇、六—四一、五	一二〇
伊 東 冬	四〇、五—六	二〇
關 口 た け ぶ	四〇、二—四一、九	二〇〇
杉 本 ま さ	四〇、一—四〇、二	一二〇
岩 村 ぶ つ	四〇、一—四〇、二	一二〇
蓮 井 清 介	四〇、四—四一、三	一二〇
杉 本 圓	四〇、四—四一、三	一二〇
佐 方 鎮	四〇、四—六	三〇
尾 田 け い	四〇、四—六	三〇
小 出 末 三	四〇、四—六	三〇
新 波 や す	四〇、四—六	三〇
吉 川 ふ み	四〇、四—六	三〇
吉 村 千 鶴	四〇、四—六	三〇
堀 越 源 三 郎	四〇、四—六	三〇
下 田 次 郎	四〇、四—六	三〇
中 村 こ う	四〇、四—六	三〇
林 村 蝶 う	四〇、四—六	三〇
加 藤 節	四〇、四—六	三〇
馬 場 と ら	四〇、三—四一、二	一〇〇
黒 田 定 治	四〇、四—六	三〇
山 内 定 治 郎	四〇、一—六	六〇
竹 島 茂 郎	四〇、四—六	三〇
山 崎 那 美	四〇、二—四一、九	二〇〇
野 崎 秀	四〇、二—四〇、一	一〇〇

謹 告

炎暑の候皆々様益御壯健奉  
賀候

休暇中も幹事時々出勤致し  
可申候に付會費等も従前通  
り本會宛にて御直送御差支  
御座なく候

明治四十年七月

幹 事

會員御中

# 家政科夏期講習會會員募集

今般本會ニ於テ女子師範學校高等女學校女子高等小學  
校教員受驗志望者ノ爲ニ必要ナル家事裁縫ノ講習科ヲ  
設ケ來ル八月一日ヨリ二十日迄講習會ヲ開ク志望ノ者  
ハ左ノ要項心得ノ上七月二十七日迄ニ申出デラルベシ

東京市神田區錦町三丁目一番地(警察前)

## 東京女子教育會

### 要 項

- |          |                    |    |     |
|----------|--------------------|----|-----|
| 一學科及講師   | 日本女子商業學校學監         | 嘉悅 | 孝子君 |
| 一家事      | 女子高等師範<br>學校助教授    | 和田 | 實君  |
| 一幼兒教育學   | 共立女子職業學<br>校講師佛國修業 | 伊澤 | 峯子君 |
| 一洋服裁縫    |                    | 平田 | 盛胤君 |
| 一國語      |                    | 榎尾 | 治君  |
| 一國語      | 在大學院文<br>學士        | 松下 | 喜三君 |
| 一實用衣類整理法 | 高等工業學<br>校助教授      |    |     |

- |       |  |
|-------|--|
| 一時 間  | 每日午前八時ヨリ午後五時迄                                      |
| 一會 場  | 一學科ニツキ十回二十時間トス<br>神田區錦町三丁目一番地東京女子教育會内<br>トス(神田警察前) |
| 一會 費  | 一學科一圓五十錢以上一學科ヲ増ス毎二一圓ヲ加<br>フ但シ國語科ハ前後通シテ二圓五十錢トス      |
| 一證明狀  | 出席ノ度數ヲ案シテ授與ス 但シ手數料十錢<br>納メルベシ                      |
| 一科外講演 | 朝野知名ノ教育家ノ講演ヲ委囑ス                                    |

## 入會申込書

本 所 籍

何々學科 現職

氏 名

生 年 月 日

右貴會夏期講習會ニ入會致シ 度此段申込  
候也

年 月 日

右

氏 名

## 東京女子教育會

主 幹 宛

フ  
レ  
ー  
ベ  
ル  
會  
發  
行

# 幼兒 教育 談 話 材 料

世に行はれて居る多くのお伽話は幼兒教育に不適當なものであります。本書の内容は特に幼兒の爲めに作られたもので幼稚園時代の幼兒に最も適當なものを集めてあります。家庭間の贈物などには最も妙なるのみならず、苟も幼兒教育に關係して居る方は是を標準として作話せられんことを希望致します。

定價金四拾錢  
會員特價參拾錢  
郵 稅 四 錢

# 幼稚園遊戲

定價金 四拾錢  
會員特價金 參拾錢  
郵稅 四錢

豫告の通り製本出來致しました。幼稚園の爲めに  
編纂され幼稚園の爲めに出版されたものは本書  
が始めてゝす。

世の幼稚園に關係せらる、方々は是非一本を座  
右に備へられんことを望みます。

尙本書には女子高等師範學校内にて作られた幼  
兒用唱歌の歌曲並に同校附屬幼稚園に於て現今  
採用せらる、保育要項とを附録として採録致し  
ました。

明治四十四年七月一日印刷  
發行

編輯者

辻本卯藏

印刷者

日下主計

發行所

女子高等師範學校内  
フレンベルグ會